

博士論文（要約）

論文題目

出来事の残響——〈原爆文学〉と〈戦後沖縄文学〉

氏名 村上陽子

本論文では〈原爆文学〉と〈戦後沖縄文学〉を一つの文脈に回収しようとするのではなく、個々の作品の分析を通して原爆文学と戦後沖縄文学が重なり合う地点を見だし、この二つの文学群をゆるやかに縫り合わせることを試みる。特に〈原爆文学〉と〈戦後沖縄文学〉が繰り返し描いてきた〈軍事占領がもたらす分断〉と〈記憶の分有〉に着目していく。本論文の第一部および第二部では〈軍事占領がもたらす分断〉を、第三部および第四部では〈記憶の分有〉をキーワードとして分析を進める。

第一部は第一章～第三章から成る。ここでは主に〈原爆文学〉の黎明期を担った大田洋子の作品およびそれに対する批評に着目していく。第一章では大田洋子の戦後の作品に対する一九五一～一九五六年頃の批評を批判的に検討し、原爆文学をめぐる批評言説の状況を明らかにすることを試みる。原爆という出来事を小説に書くことの困難を十分に捉えきれていなかった批評言説の問題をここで問うておきたい。第二章では「ほたる——「H市歴訪」のうち」（一九五三年）を論じる。「ほたる」の語り手の「私」は、広島を訪れる「外国人」がケロイドを負った被爆者を「見世物」にすることを嫌悪していた。原爆を落とした国でありながら広島でそのような行動を取るアメリカへの批判がそこに含まれていることは言うまでもない。しかしケロイドを見馴れてくるにつれて「私」は「作家」としての立場を回復し、彼／彼女を「見世物」化するまなざしに近接していく。このときに被爆者の少女が見つめ返す者としてたちあられ、見ることの権力性や欲望を露呈させていることを示す。第三章では神経科に入院した女性作家を描いた「半人間」（一九五四年）を取り上げる。講和条約発効前後の状況や朝鮮戦争の動向によって精神を苛まれる主人公は、戦後日本とアメリカから逃れる術として〈半人間〉という生に留まろうとしていた。それは戦争の記憶やジェンダーや階層に伴う被傷性、引き裂かれた主権の問題を改めて提示するものだったと言える。しかし同時に、女性性や被傷性を帯びた主体がアメリカを批判的に捉える際に被害者としての「日本人」が立ち上げられてしまうという問題もある。そのような両義性を踏まえ、〈半人間〉が有する射程と限界について考察を進めていく。

第二部は第四章～第六章から成る。ここでは一九六〇年代後半から一九七〇年代初めにかけて発表された長堂英吉、大城立裕、嶋津与志の作品を扱う。第四章では長堂英吉「黒人街」（一九六六年）を取り上げる。ここにはベトナム戦争期の米軍内部の人種差別と、沖縄の人間が「黒人兵」に対して抱いていた差別意識が描かれている。「黒人兵」と「黒人街の名物女」である沖縄人女性うめを結び付ける重要なモチーフとして作品に呼び込まれ

る日の丸が当時の沖縄においてどのような意味を持っていたかを明らかにし、したたかな存在として表象される「黒人兵」やうめに刻印された被傷性及びそれぞれが属する社会や国家への反抗心がどのようなかたちであらわれているかを考察する。第五章では大城立裕「カクテル・パーティー」（一九六七年）を扱い、娘や妻をレイプされた被占領者の男性たちが占領者の法的、文化的、言語的優位性を批判する言葉を獲得していく過程を明らかにする。男性たちが批判の言葉を獲得していくとき、当事者の女性の言葉は父や夫によって抑圧され、沈黙を余儀なくされていく。また、占領下沖縄の法や言語によって苦痛と沈黙を強いられる被害者の女性の抵抗が加害者の身体に刻まれ、合意の否認として受け止められていることを明らかにする。第六章では嶋津与志「骨」（一九七三年）を取り上げる。「骨」は表面的には戦後世代が沖縄戦の記憶を追体験していく作品として捉えられる。しかし作品の細部を読み込んでいくと、家族から聞いていた戦争の語りが暴力の記憶をはらむがゆえに奇妙なねじれを伴って語られ、受け取られていることが明らかとなる。また、沖縄の土地の開発が常に軍事基地の機能維持を目的としてなされてきたことを示し、「骨」と現在の沖縄の状況を接続させることを試みていく。

第三部は第七章～第九章から成る。ここでは一九七〇年代後半から一九八〇年代半ばに焦点を合わせる。まずは一四歳のときに長崎で被爆した林京子の作品を取り上げる。また、非当事者の書き手として原爆に向き合い、非常に早い段階で原爆を小説の主題として選んだ井上光晴の作品にも言及していく。第七章では林京子の文壇的デビュー作となった「祭りの場」（一九七五年）を扱う。記憶を補完し、正確に記述するため、作中にはたびたび記録が引用される。そのうちの一つは、浦上の聖者と呼ばれた永井隆の手によるものである。敬虔なキリスト教徒であった永井が浦上の犠牲を神の御心として容認したことと、原爆を投下したアメリカへの批判が「神の御子」という言葉の用いられ方に含まれていることを示していきたい。第八章では林京子の短篇連作『ギヤマン ビードロ』（一九七八年）を取り上げる。連作のすべてに言及することはできないが、語り手の「私」が友人たちと被爆の体験を語り合ったり、あらためて出会い直したりする短篇を中心に上げていく。当事者が自らの体験に向き合い、出来事を再審することで、自分自身の当事者性に回収しきれぬものを見いだしていく過程に着目する。第九章では井上光晴「西海原子力発電所」（一九八六年）を扱う。地域に不安をもたらし、住民を引き裂いていく原爆の不気味さを描いたこの作品において特に注目したいのは〈贖被爆者〉という存在である。原爆投下か

ら数日後に長崎に入って被爆した人間、被爆体験を持たない人間が当日その場にいたかのように偽って長い年月を過ごし、その嘘が暴かれたときに〈贗被爆者〉として糾弾される。

〈贗被爆者〉は他者の傷を自分自身の傷として受け取った者が出来事を語ることを通して事後的に当事者として形成されていく可能性と、雄弁な語りや当事者として行うさまざまなパフォーマンスによって死者の領域、沈黙の領域を恣意的な言葉で埋めてしまうという危険性を合わせ持つ。このような両義的な存在を現代の問題にいかに関接させていくかを模索したい。

第四部は第十～第十二章から成る。ここでは戦後生まれの書き手たちが沖縄戦の記憶をどのように描いていったかを検討する。戦後の時空間において、当事者が統御しえない戦争の記憶に苛まれる姿をそこに見いだすことができる。第十章では又吉栄喜「ギンネム屋敷」（一九八〇年）を扱う。「ギンネム屋敷」はこれまで沖縄における朝鮮人差別を扱った先駆的な作品として注目されてきたが、男性同士の関係性に着目して論じられることが多かった。ここでは言葉なき存在として排除されてきた朝鮮人従軍慰安婦をはじめとする女性たちが〈亡霊〉というかたちで回帰し、男性たちに常にすでに影響を及ぼしていることを明らかにしていく。また、沖縄の人々の戦争責任や朝鮮人差別が顕在化するとき、恒常的な暴力を行使している米軍の存在が忘却されていくことも指摘していきたい。第十一章では目取真俊「風音」（一九九七年）を取り上げる。「風音」は、特攻隊員の遺骨である泣き御頭を吹き抜ける風音によって、語られないままに個人の内部に留まる戦争の記憶が呼び起こされていく作品である。その音は個人の記憶の中で響き続けている別の音に結びつき、出来事を再来させる。記憶に囚われ、風葬場に引き寄せられていく二人の男性の間に生起する同性愛的欲望や、他者の記憶に知らず知らずのうちに巻き込まれていく瞬間を作品の分析を通して明らかにしていく。死者の声に対して恣意的な意味付けを行うことなく空白として受け取ることの重要性と、自分のものではない体験をいつのまにか受け渡され、無自覚のうちにそれを生き直す可能性をこの作品から読み取っていきたい。第十二章では目取真俊「水滴」（一九九七年）を扱い、戦争の記憶および経済と結び付く水の循環に着目する。「水滴」では主人公の足先から滴る水が戦争の記憶を到来させると同時に若返りの効果を持つ霊水として売買され、記憶と経済の循環を成立させている。そこには男性の身体を介して成立する水の循環によって体験が分有される可能性が見られるが、一方で女性身体が水の循環＝記憶・経済の循環から排除されていくことを明らかにする。

本論文は以上のように〈原爆文学〉と〈戦後沖縄文学〉の諸作品についての考察を進めるものである。文化や状況が大きく異なる複数の場所で生み出されてきた、破壊的な出来事について語る文学の系譜は、一つに回収することができるものではない。しかしそれでもなお、この二つの文学の領域を同時に検討していくことで見えていくものがあると考えられる。〈原爆文学〉、〈戦後沖縄文学〉は時に称揚され、時に消費されながら日本文学の周縁に位置づけられてきた。言い換えればこれらの文学は周縁から、戦後日本に生き、日本語を解する人々に向けた表現を模索してきた。〈原爆文学〉や〈戦後沖縄文学〉はその基底に存在する出来事と向き合う中でつかみとられた言葉であると同時に、常にすでに、体験を共有していない人々に対して発せられてきた呼びかけでもあった。出来事の内部には語ることもすらできずに失われていった死者が横たわり、跳梁し、体験の当事者を領有していたし、言葉にできないまま澱のように沈潜する体験もあったはずである。文学は沈黙や矛盾、整合性や立証が充分ではない記憶などを織り込むことを可能にする表現であった。個々の作品の分析を通して軍事占領が強いる分断を明らかにし、他者の体験や痛みを分有する契機を見いだしていきたい。